

状をもつて申し候、倍ますます申し談じられ、堅固の覚悟簡要に候、委細しさいは猶なお

浦上左京入道が申しべく候、恐々謹言

(永禄十一年)

(大友)

七月三日

宗麟

(花押)

長野三河守殿

『合志文書』

永禄十一年六月二十八日、岩隈城に毛利方が立て籠もつたので、長野三河守(長野三郎左衛門助盛―等覚寺城主)が入田丹後入道、城井左馬助(宇都宮長房)、安東三郎らと岩隈城を攻め落としたときの文書である。

同年九月、毛利勢吉川、小早川の両軍五万余が「長野退治」と称して、三ヶ岳城と等覚寺城に襲いかかり陥落させた。

三ヶ岳城は長野兵部少輔弘勝以下、ほとんど全滅状態となった。等覚寺城の長野三河守助盛は、豊後へ逃げたといわれる。

第三節 勝山町周辺の古城跡

一 馬ヶ岳城 行橋市大谷・京都郡犀川町花熊

行橋市と犀川町との境、今川にかかる天生田橋あもうだばしの南西に、くつついて並ぶ二つ瘤こぶの山が見える。標高二一六メートル、東峰(二の岳)と西峰(一の岳)とに分かれ、豊前の名城といわれた馬ヶ岳城のある山である。

東峰は貫神社ぬきの古い石祠と、五〇いしたらずの不動明王の名像があり、城跡にふさわしい点影となっている。

東西三二メートル、南北一六メートルの広さで二の丸である。

西峰は、南北二七メートル、東西一〇メートルの広さで本丸跡といわれる。中央に、昭和三年建立の「新田氏表忠碑」の大きな石碑がたつ。

馬ヶ岳城は、『豊前古城誌』(熊谷克己編 一九〇三年)などによると、天慶五年(九四二)、清和源氏の祖源経基が築いたという。

その後、大宰府の直轄の城として重きをなし、武藤氏が大宰少弐となつてからは武藤(少弐)氏の城となった。

貞和年間(一三四五―五〇)西征府將軍宮懐良親王が九州に下向したときに、親王に従つた新田上野介義基(新田義貞の一族)が馬ヶ岳城に入城、三代新田氏の居城となり、南朝方の九州における拠点となった。

重要な城だけに戦闘は数知れない。

『応永戦覧』(天野義重編集―元禄十年(一六九七)には、新田義氏と大内勢との一戦が紹介されている。

応永五年(一三九八)十月、大友氏鑑おわたもしあきつが兵を挙げ、豊前に侵入した。新田上野介義氏は大友方に加わつた。豊前の守護職は、大内義弘である。このために大内氏の攻撃を受けることになる。

築城原（築上郡築城町と行橋市新田原）で二万の大友勢を破つた大内勢は、馬ヶ岳城攻撃に移った。新田は、全軍をあげて籠城と決まった。

馬ヶ岳籠城の兵は二八〇〇余、大内勢は二万余騎、到底抵抗できる兵力ではなかった。

十二月二十八日、最前線の妙見の陣が破られた。矢留坂の陣も無残な敗北。義氏は、相次ぐ敗戦の報にも動ぜず、「馬ヶ岳は西国名城の一つ。敵何十万騎攻め来ても簡単には落ちぬ」と将兵を激励する。

大内勢は、一気に攻め落とせと四方から関の声をあげて攻めかかる。城兵は決死の形相で大内勢を迎え撃つ。

大石を転がす。這い登る敵に矢を射かける。城兵の果敢な抵抗にもかかわらず、城攻めは猛烈を極めた。

悪戦苦闘の末、大内勢は本丸にとりつき櫓に火が掛けられた。

義氏は、大内盛見に降伏を申し入れ戦いは終わった。

朝からの合戦であったが、日が暮れて天候は一変、大雪となったという。

永享三年（一四三二）六月、中国の雄大内盛見は、二丈岳城（糸島郡二丈町）の合戦で戦死した。

大内氏の後継者に大内持世がなり、大内盛見の嫡男掃部頭かものかみ教幸は後を継げず、家督相続に不満を残した。その教幸の居城

が馬ヶ岳城であった。

文明元年（二四六九）、少式嘉頼、教頼が謀反を起こした時、大内教幸は少式に味方して馬ヶ岳城に籠もった。

十二月二十三日、大内持世の子、大内政弘の命を受けた長野五郎義信、千手信濃守冬通らに攻められた。

文明二年（一四七〇）正月十五日、教幸は、防戦に努めたが力尽き、加嘉丸、獅子丸の二人の子を殺し、教幸も自害し落城してしまった。

天正六年（一五七八）、長野城主であった長野三郎左衛門助盛の居城となった。

天正十五年（一五八七）、豊臣秀吉は九州平定の際、当城に立ち寄り宿舎とした。

九州平定後、豊前国は黒田孝高（如水）の領地となり、孝高、長政父子は、中津城（大分県中津市）完成まで馬ヶ岳城を居城とした。

慶長五年（一六〇〇）には、細川忠興の持城となり、元和元年（一六一五）の一國一城令により、この豊前の名城といわれた馬ヶ岳城は廢城、破却されてしまった。

二 宝山城 行橋市大字宝山

JR行橋駅の南三キロほどの、今川小学校の北側に位置する王埜八幡宮の社地が城跡である。